

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第47集

東 田 遺 跡

河 津 町

平成25～26年度（主）下佐ヶ野谷津線
地域自主戦略交付金（交通安全）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第47集

東 田 遺 跡

河 津 町

平成25～26年度（主）下佐ヶ野谷津線
地域自主戦略交付金（交通安全）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

静岡県埋蔵文化財センター

序

東田遺跡は、河津町内を流れる河津川左岸の河岸段丘上に立地する遺跡です。河津川に沿って走る県道下佐ヶ野谷津線の拡幅工事に伴って発掘調査を実施しました。この結果、縄文時代の土器と石器が出土しました。出土した土器の時期から、遺跡の存続期間が縄文時代中期初頭から後期初頭に及ぶことが明らかになりました。また、石器は石鏃や楔形石器などとともに、伊豆半島南部では初例となる細石核が出土しました。この細石核は、後期旧石器時代の遺跡がこの地にも拡がっていたことを示す重要なものです。

河津町域は、段間遺跡や春蔵遺跡など、縄文時代中期の集落遺跡が多く分布する地域であります。本遺跡の発掘調査を実施したことによって、河津町域における縄文時代中期の遺跡の様相をより深く知るための貴重な資料を得ることができました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県下田土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2015年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長
赤 石 達 彦

例　　言

- 1 本書は静岡県賀茂郡河津町川津篠場地内に所在する東田遺跡の発掘調査報告書である。
2 調査は（主）下佐ヶ野谷津線地域自主戦略交付金（交通安全）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県下田土木事務所の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
3 東田遺跡の本発掘調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。
　本発掘調査 平成 25 年 7 月 調査対象面積 80 m² 実掘面積 40 m²
　資料整理 平成 26 年 10 月～平成 27 年 3 月
4 調査体制は以下のとおりである。
　平成 25 年度（本発掘調査）
　　所長 勝田順也 次長兼総務課長 南谷高久 調査課長 中鉢賢治
　　主幹兼事業係長 前田雅人 主幹兼総務係長 大坪淳子
　　主幹兼調査第一係長 及川 司 調査第二係長 溝口彰啓 主査 丸杉俊一郎

　平成 26 年度（資料整理）
　　所長 赤石達彦 次長兼総務課長 長谷川明子 調査課長 中鉢賢治
　　主幹兼事業係長 杉山智彦 主幹兼総務係長 大坪淳子
　　主幹兼調査係長 及川 司 主幹（東部地区グループ長）溝口彰啓 主査 岩崎しのぶ

5 本書の執筆は岩崎が行った。
6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
7 発掘調査・資料整理にあたっての業務の外部委託先は以下のとおりである。
　掘削業務委託 さくら建設株式会社
　測量業務委託 株式会社パスク
　整理作業業務委託 株式会社パソナ
8 発掘調査・資料整理では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
　（五十音順・敬称略）
　池谷信之 小野英樹
9 発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VIII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
 $(X = -136,470, Y = 42,600) = (A, 0)$
- 3 遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』(農林水産省技術会議事務局監修 1992)を使用した。
- 5 土層名は第3章第2節の基本土層図(第6図)に表示した名称を用いる。
- 6 第1章第1節の遺跡位置図(第2図)は国土地理院発行1:50,000地形図「稻取」「下田」を、第2章第2節の周辺遺跡分布図(第4図)は同1:25,000地形図「稻取」「湯ヶ野」「下田」を複写し加工・加筆した。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 東田遺跡の調査	
第1節 調査の方法と経過	8
第2節 基本土層	10
第3節 遺物	12
第4章 東田遺跡のまとめ	18
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図 河津町位置図	1	第6図 基本土層図	10
第2図 東田遺跡位置図	2	第7図 土層堆積状況図	11
第3図 遺跡周辺表層地質概要図	4	第8図 出土遺物実測図1（土器）	13
第4図 東田遺跡周辺の遺跡	7	第9図 出土遺物実測図2（石器）	16
第5図 調査区配置図	9	第10図 遺物分布図	17

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	6	第3表 出土遺物観察表（土器）	15
第2表 現地調査・資料整理期間一覧表	8	第4表 出土遺物観察表（石器）	15

写真図版目次

図版1 調査区遠景（北西より）		図版3 土器 五領ヶ台式・勝坂式・ 加曾利E式
1-1区全景（西より）		
図版2 1-2区全景（北より）		図版4 土器 曽利式・称名寺式 剥片石器 磨・敲石類
土層断面		

第1章 調査に至る経緯

河津町は日本のほぼ中央部に位置する静岡県の東部、伊豆半島の南東岸に位置する（第1図）。町の北西には天城連山がそびえ、その面積の大半は山林・原野で占められている。町の中央部を北西から南東に流れる二級河川河津川の流域に平野が拡がり、海に向かって開けた地勢をなしている。河津川は、上流には河津七滝があり、下流域の川沿い一帯には河津桜が植林されており、伊豆地域を代表する観光名所となっている。河津町域の道路は、主に沿岸部と、河津川沿いの狭い平地に造られているが、幅員の狭い道路が多いため、度々交通渋滞が発生し、地域住民の生活や観光産業に支障をきたしている。

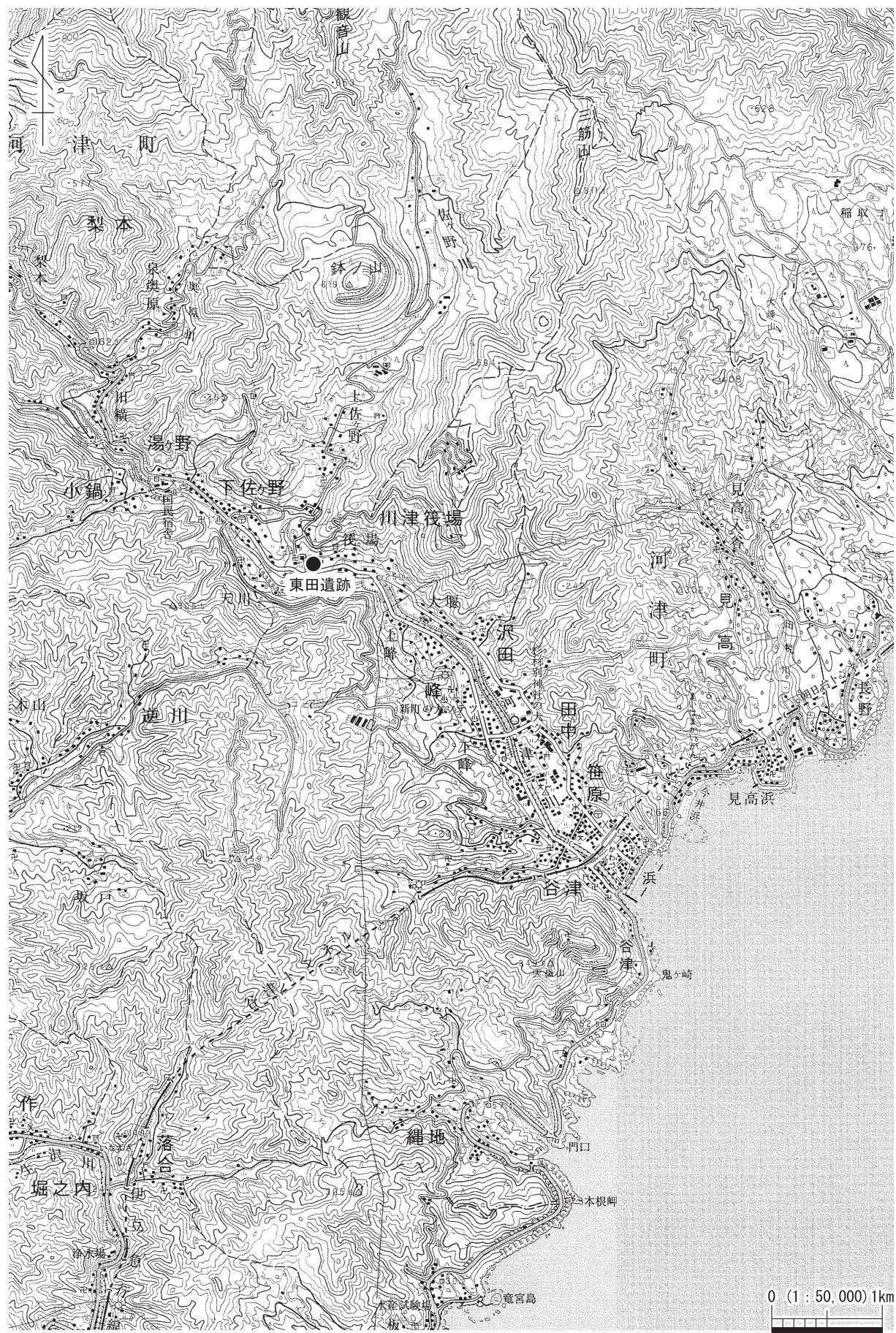
この事態を解消し、より安全な道路を整備することを目的に、静岡県下田土木事務所（以下下田土木）は（主）下佐ヶ野谷津線の拡幅工事を計画した。平成22年、下田土木は静岡県教育委員会文化財保護課（以下保護課）の事業照会に対して、この事業を計画していることを回答した。保護課は工事計画範囲における周知の埋蔵文化財包蔵地の存在の有無を調べた結果、工事計画範囲内に東田遺跡が含まれていることが明らかとなり、下田土木に保護課との調整が必要であることを回答した。

保護課は平成24年9月、遺跡包蔵地内にて、試掘・確認調査を実施した。この結果、縄文時代の土器片と石器を含む遺物包含層があることが確認された。工事によって遺跡が破壊されることから、保護課は記録保存を対象とした本発掘調査を行う必要があると判断し、下田土木にこの旨を報告した。

本発掘調査は静岡県埋蔵文化財センター（以下センター）が実施する運びとなった。平成25年4月、下田土木はセンターに埋蔵文化財調査を依頼した。センターは平成25年7月に本発掘調査を実施した。



第1図 河津町位置図



第2図 東田遺跡位置図

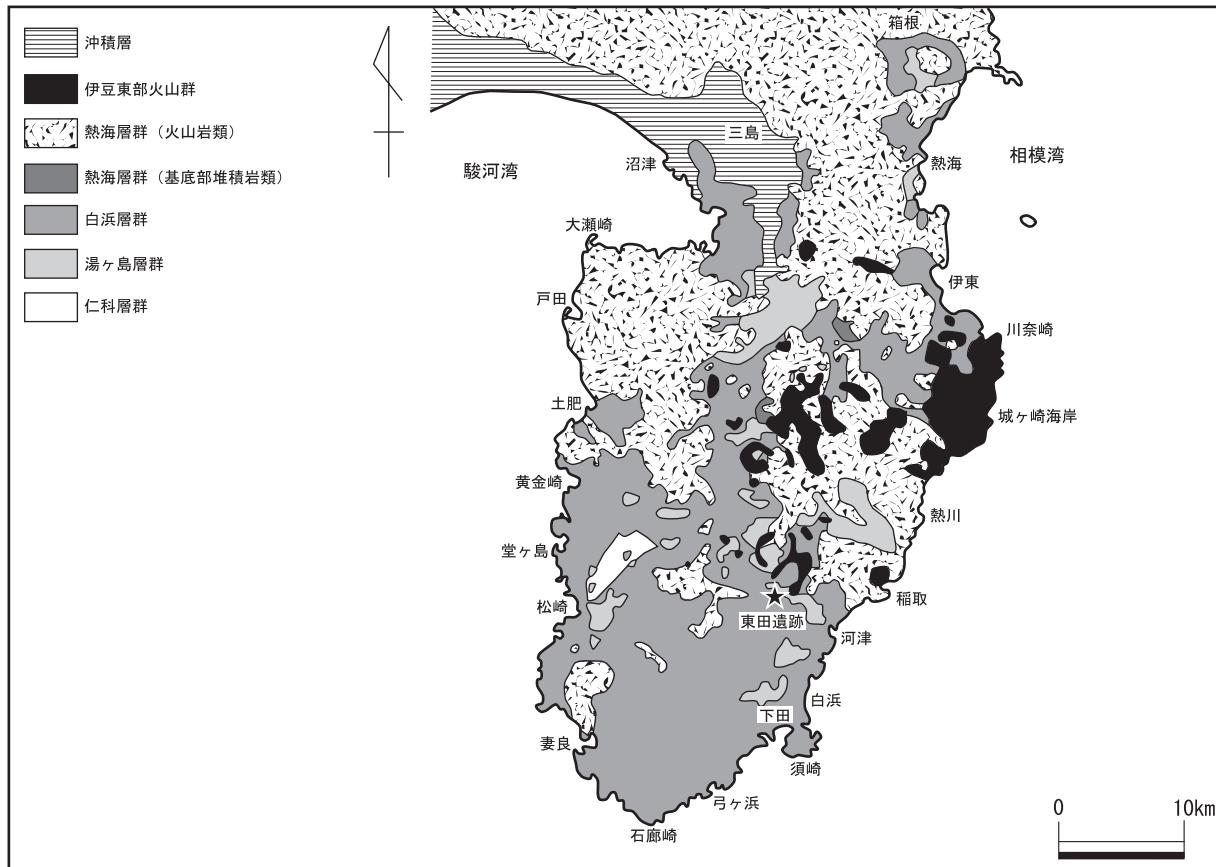
第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

東田遺跡は静岡県賀茂郡河津町川津筏場、伊豆急行線河津駅から北西に約3.5km離れた地点に位置する。標高は現地表面で約46mをはかる。(第2図)。

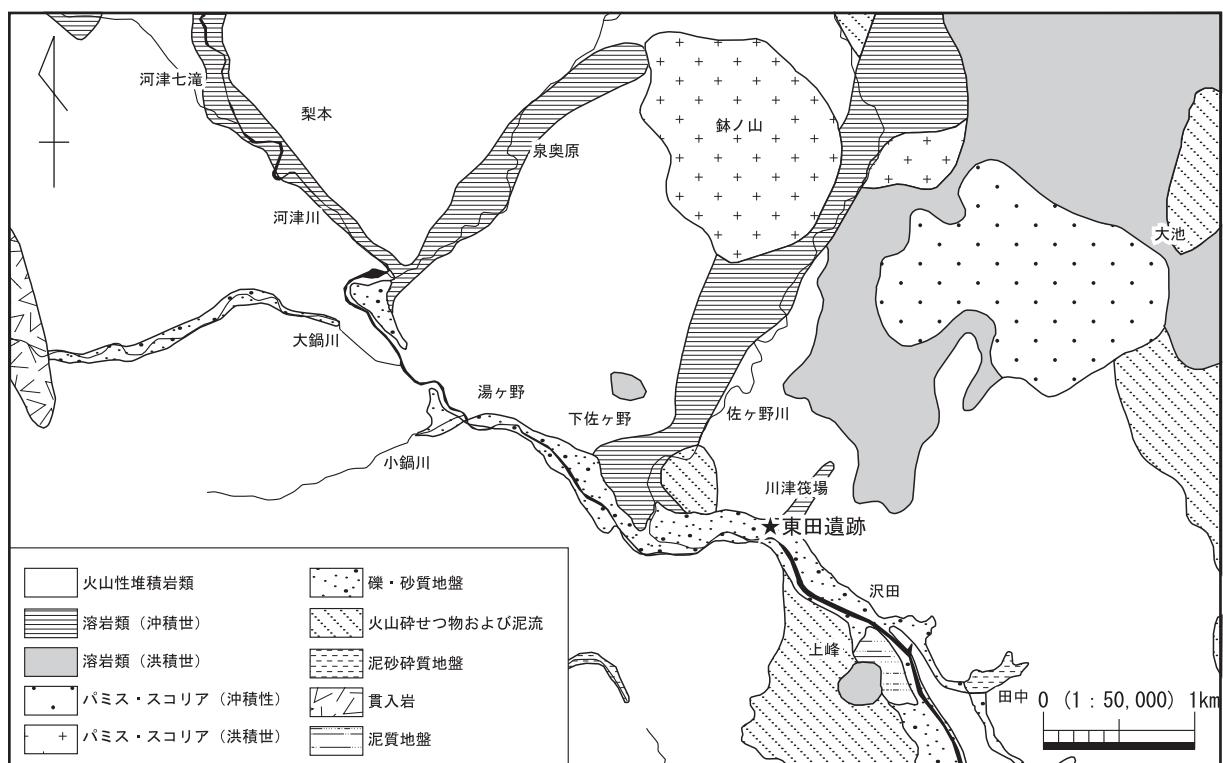
東田遺跡が立地する伊豆半島は、4000万年以上の長い時間に及ぶ海底と陸上の火山噴火で造り出されている。このうち約2000万年分の地層が現在の地表に見えており、残りは地下に埋もれている。約2000万年前から1000万年前の伊豆は、本州から南に数百キロメートル隔たった海底火山群であった。これらの海底火山から噴出した溶岩や火山礫、火山灰などが当時の海底に堆積してできた地層は、古い順に仁科層群、湯ヶ島層群と呼ばれている。岩相は玄武岩質から安山岩質の溶岩や火碎堆積岩を主とし、より酸性の火山岩、火山性堆積岩、石灰岩等を少量含む。その後約1000万年から200万年前、伊豆全体が浅い海となったため、海面上にその姿を現し、火山島になった火山もあった。この時期に噴出した溶岩や火山礫、火山灰層で成り立つ地層は白浜層群と呼ばれている。岩相は中性～酸性火碎岩類が多く、白色凝灰岩が特徴的であり、少量の玄武岩類、砂岩、石灰岩等が含まれる。湯ヶ島層群より酸性物質を多く含み、またより細かい堆積単位を示す傾向がある。約200万年前から100万年前は海底火山がフィリピン海プレートの移動に伴って本州と衝突して合体しようとしていた時期である。この時初めて伊豆の大部分が陸地となり、以後はすべての火山が陸上で噴火するようになった。この時期の堆積物は熱海層群と呼ばれている。60万年前までに伊豆は本州から突き出た半島の形になり、現在見られる伊豆半島の原形ができあがった。陸地となった伊豆半島のあちこちで噴火が起き、天城山や達磨山などの大型の成層火山ができた。20万年前までに伊豆半島はほぼ現在の姿となり、このころになると北方の箱根火山を除くすべての火山は噴火を停止した。15万年前以降は火山活動の性質が大きく変わり、大室山、カワゴ平に代表される伊豆東部火山群が噴火を始めた。伊豆東部火山群は国内では事例の少ない独立單成火山群であり、現在でも時おりマグマ活動を続けている。陸化して間もないという事情から伊豆の台地はまだ激しい浸食の途上にあり、地形が山がちなうえに多くの海岸線も急な崖となっている。大河と呼べる川がまだできていないために広い平野も存在しない。

現在の伊豆半島南東部は白浜層群、一部湯ヶ島層群の急峻な山が海岸線まで迫り、山地に挟まれた谷間をぬって小河川が流れている。河津川は天城山に源を発し、町の北西から南東に向かって流れ、途中荻入川、奥原川、大鍋川、佐ヶ野川などと合流し、相模湾にそそぐ。河津川とその支流の流域は河岸段丘を発達させ、その中流域から下流は沖積地を造り出している。東田遺跡は河津川と佐ヶ野川の合流地点付近の礫～砂礫地盤の河岸段丘上に立地するが、すぐ北方には、伊豆東部火山群の中では大室山に次ぐ大きさを持つスコリア丘である鉢ノ山から流れてきた溶岩が迫っている(第3図)。



伊豆半島の概略地質図

(伊豆ジオパーク連絡協議会 2012『南から来た火山からの贈りもの 伊豆ジオパーク構想
日本ジオパークネットワーク加盟申請書』より転載・加筆)



表層地質図(静岡県総務部防災局 2002『地域の地盤と地震被害(伊豆南部地域)』より転載・加筆)

第3図 遺跡周辺表層地質概要図

第2節 歴史的環境

東田遺跡周辺の遺跡分布図を第4図に示した。

1 旧石器時代

第4図には掲載されていないが、本遺跡から東南東に4.5km離れた位置にある宮林遺跡で、姶良Tn広域火山灰(AT)より下位の層位から石器ブロックと土坑群が検出されている(河津町教委2010・2012)。

2 繩文時代

河津川とその支流である佐野川に挟まれた台地上に立地する長坂遺跡(7)では、押型文土器、田戸下層・上層式、子母口式併行期の土器が出土している(河津町教委1980)。また、加曽利E式と推定される土器と石器も出土している(河津町教委1983)。菖蒲沢海岸に接する断崖上の台地に立地する俎平遺跡(36)では、茅山式土器を主体に、粕畠式、上ノ山式など早期末の土器と石器が出土している。また、木島式など前期の土器や中期初頭の土器、中期後半の加曽利E式土器も出土している(河津町教委1983)。河津川右岸の台地上に立地する春蔵遺跡(29)では中期後半の曾利II式期の竪穴式住居跡が6軒検出されている。包含層中からは前期の諸磯b・c式土器、十三菩提式土器、中期の五領ヶ台式土器、新道式併行、藤内I式、井戸尻I式、曾利I~III式、加曽利E2式土器が出土している(山武考古学研究所1992)。この他、縄文時代の遺跡は丘陵上あるいは河津川が形成する河岸段丘上を中心に多く分布している。三筋山の中腹には小池遺跡(1)、大池遺跡(2)、佐ヶ野川右岸の河岸段丘上にはカミノタイラ遺跡(3)、細工谷遺跡(4)、鉢ノ山の中腹には湯ヶ野山遺跡(5)が存在する。河津川左岸には萩原遺跡(10)、沢田遺跡(11)が存在し、右岸には茶屋遺跡(19)、平の平遺跡(20)、長ヶ野遺跡(21)、猪ヶ野遺跡(22)、段の平A遺跡(23)、段の平B遺跡(25)、蛭田A遺跡(26)、大地ヶ原遺跡(28)が存在する。天嶺山北西の伊豆急行線沿いには万能爪遺跡(30)、南禅寺遺跡(31)が存在する。時期は中期のものが主体である。また、河津川下流の沖積地に立地する姫宮遺跡(18)では、晩期末~弥生時代初頭の住居跡と土器棺墓が検出されている(河津町教委1984a)。

3 弥生時代

姫宮遺跡(18)で中期の方形周溝墓が検出されている(河津町教委1984a)。波来洞穴(35)は海に向かって開口している自然の海蝕洞穴である。洞穴前部より中期初頭の土器が出土している(河津町教委1978)。河津川河口近くに立地する館の内遺跡(34)は土器が出土しているとされているだけで実態は不明である。

4 古墳時代

姫宮遺跡(18)で前期から奈良時代にわたる竪穴住居跡群、前期の方形周溝墓群、前期から中期の祭祀遺構などが検出されている(河津町教委1994他)。姫宮遺跡の上流にある、延喜式内社杉梓別命神社と推定される来宮神社の一帯にある中村遺跡(15)は、古墳時代後期から奈良時代の土師器・須恵器・鉄滓等が出土していると伝えられている。波来洞穴(35)は古墳時代後期の墓であり、洞穴内より複数体の人骨とともに土師器・須恵器・鉄製品などが出土している。

5 奈良・平安時代

春藏遺跡（29）で8世紀中葉から10世紀前半の堅穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出され、転用窯や墨書き土器・刻書き土器が多く出土している。河津川下流の沖積地に立地する金草原遺跡（14）は鉄滓・炉壁・轆羽口が表採され、製鉄関係の遺跡と考えられている。

6 中世

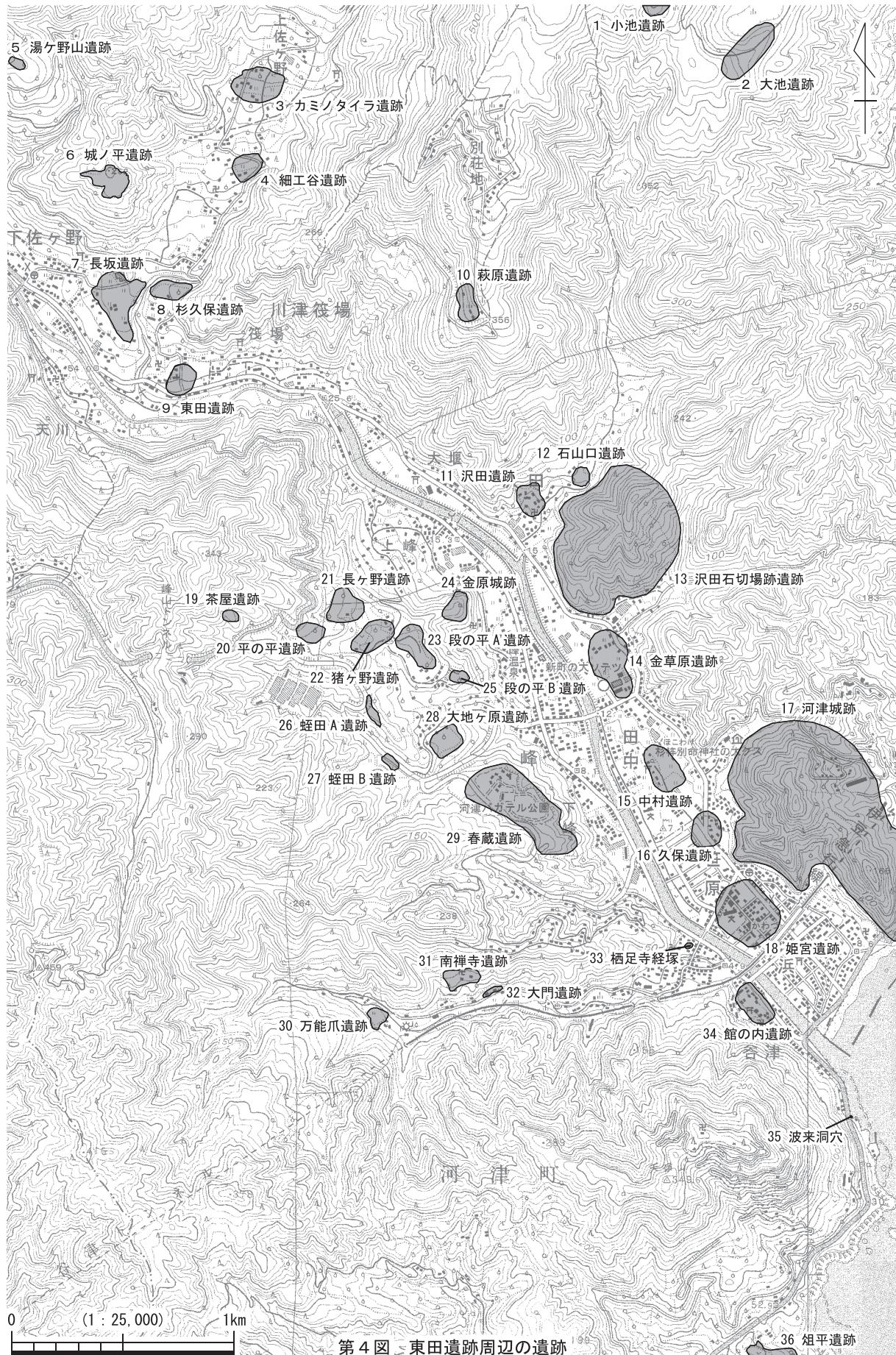
館の内遺跡（34）は平安時代末から鎌倉時代初めの河津氏の居館跡と言われており、小規模な掘立柱建物跡が検出されている（河津町教委1994）。鉢ノ山の中腹に立地する城ノ平遺跡（6）は、築城者や築城年代は不明だが、踏査により土壘、空堀などが確認されている。河津川右岸に立地する金原城跡（24）は、南北朝時代、足利氏の勢力下となっていた伊豆国河津庄峰に配置された三根金原城主塙本豊後守に従ってきた足利氏の主護である三河国の家臣の子孫が築いた砦であると考えられているが、遺構の残存状況は悪く、空堀跡と伝えられる窪地が残っているのみである。河津城跡（17）は、文献には記載されていない城跡であるが、発掘調査の結果、山頂部だけでなく、尾根沿いにも郭を持った城郭であることが判明した。また、15世紀後半から16世紀初めの常滑焼の大甕の破片が大量に廃棄された状態で出土している（河津町教委1993）。河津川左岸の丘陵地に立地する石山口遺跡（12）、右岸の丘陵地に立地する蛭田B遺跡（27）は製鉄関係の遺跡と考えられている。

7 近世

沢田石切場跡遺跡（13）は沢田石または伊豆石、伊豆の青石等と呼ばれる石の石切丁場である。現在も継続して採掘が続けられており（河津石材）、江戸時代の採掘跡もかなり残存している。栖足寺経塚（33）は一字一石経の存在が伝えられている。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	文化財の年代									備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	近現代	
1	小池遺跡	河津町川津筏場		○								縄文土器
2	大池遺跡	河津町見高		○								縄文土器・石器
3	カミノタイラ遺跡	河津町川津筏場		○								縄文土器（中期）
4	細工谷遺跡	河津町川津筏場		○								縄文土器（中期）
5	湯ヶ野山遺跡	河津町湯ヶ野		○								縄文土器（中期）
6	城ノ平遺跡	河津町下佐ヶ野							○			土壘・空堀・古井戸
7	長坂遺跡	河津町下佐ヶ野		○								縄文土器（中期）・石器
8	杉久保遺跡	河津町川津筏場									○	製鉄関連遺跡か？
9	東田遺跡	河津町川津筏場		○								縄文土器（中期）
10	萩原遺跡	河津町川津筏場		○								石器・石製品
11	沢田遺跡	河津町沢田		○								石器
12	石山口遺跡	河津町沢田							○			製鉄関連遺跡か？
13	沢田石切場跡遺跡	河津町沢田								○	○	採掘は現在も継続
14	金草原遺跡	河津町田中					○	○				製鉄関連遺跡
15	中村遺跡	河津町田中			○	○						土師器・須恵器
16	久保遺跡	河津町笛原				○	○	○	○	○		製鉄関連遺跡か？
17	河津城跡	河津町笛原							○	○	○	常滑焼大甕
18	姫宮遺跡	河津町笛原		○	○	○	○	○				堅穴住居跡・土器棺墓・方形周溝墓等
19	茶屋遺跡	河津町峰		○								縄文土器・石器
20	平の平遺跡	河津町峰		○								縄文土器（中期）
21	長ヶ野遺跡	河津町峰		○								縄文土器（中期）
22	猪ヶ野遺跡	河津町峰		○								縄文土器（中期）・石器
23	段の平A遺跡	河津町峰		○								縄文土器（前期・中期）・石器
24	金原城跡	河津町峰							○			空掘跡
25	段の平B遺跡	河津町峰		○								縄文土器・石器
26	蛭田A遺跡	河津町峰		○								縄文土器・土製品
27	蛭田B遺跡	河津町峰							○			製鉄関連遺跡か？
28	大地ヶ原遺跡	河津町峰		○								縄文土器・石器
29	春藏遺跡	河津町峰		○			○	○	○	○		堅穴住居跡（縄文中期・奈良～平安）
30	万能爪遺跡	河津町谷津		○								縄文土器
31	南禪寺遺跡	河津町谷津		○								石器
32	大門遺跡	河津町谷津									○	製鉄関連遺跡か？
33	栖足寺経塚	河津町谷津								○		一字一石経
34	館の内遺跡	河津町谷津			○				○			掘立柱建物跡 かわらけ
35	波来洞穴	河津町谷津			○	○						弥生土器・土師器・須恵器・人骨
36	組平遺跡	河津町浜		○								縄文土器（早期～中期）・石器



第4図 東田遺跡周辺の遺跡

第3章 東田遺跡の調査

第1節 調査の方法と経過

1 発掘調査

排土処理の都合上、本発掘調査範囲の東側を1-1区、西側を1-2区とし、国土座標を基準に10m単位のグリッドを設定した（第5図）。

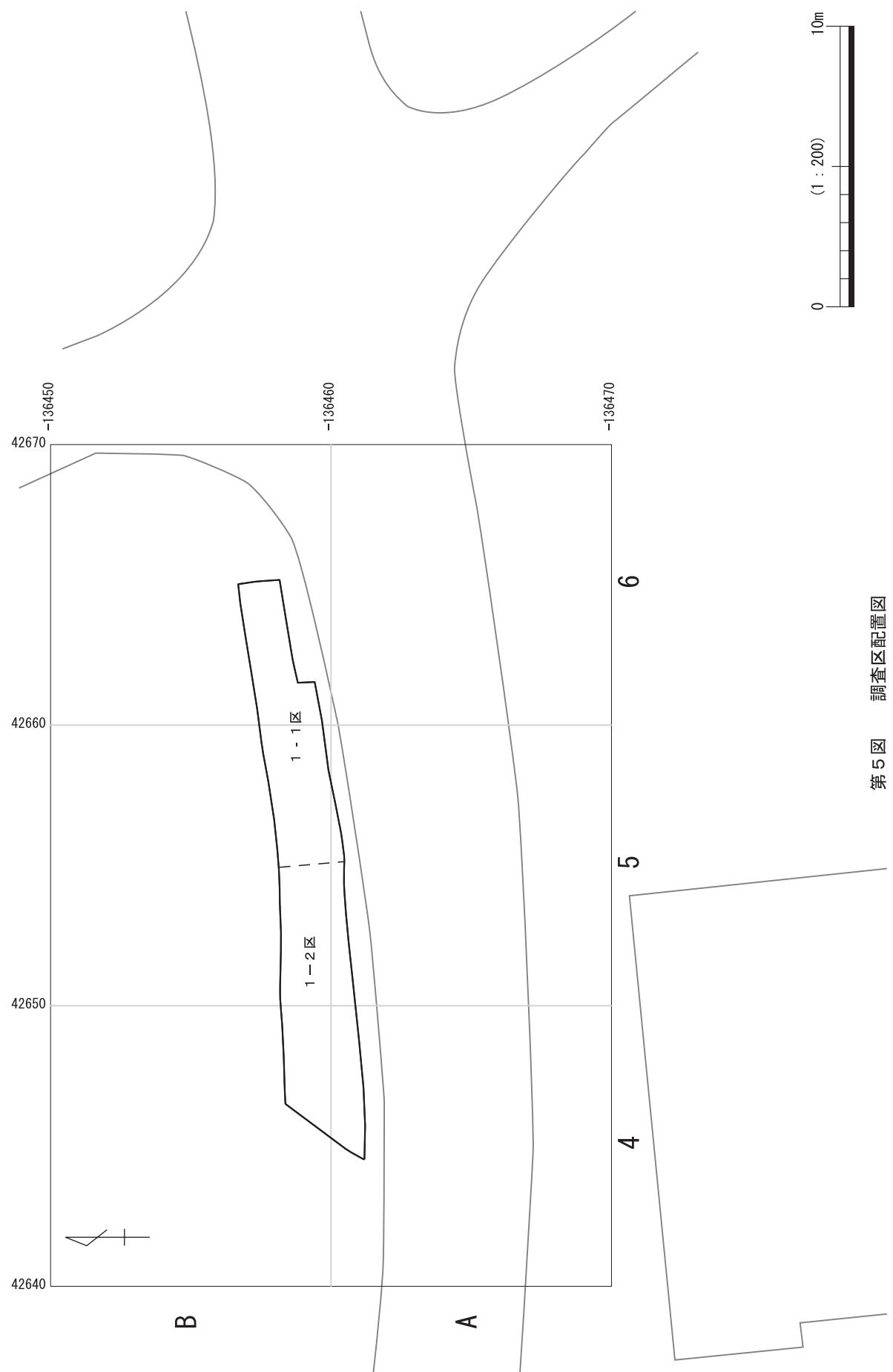
7月11日に1-1区の重機による表土除去を実施し、続けて包含層の掘削作業に入った。7月12日に出土遺物分布図の作成を実施した。7月16日に遺構検出を行い、全体写真撮影及び土層堆積状況の記録作成を実施した。7月17日に埋め戻し作業を実施した。

7月17日と19日に1-2区の重機による表土除去を実施した。続けて第1面包含層の掘削を行い、出土遺物分布図の作成を実施した。7月23日に第2面包含層の掘削と遺構検出を行い、全体写真撮影及び出土遺物分布図の作成を実施した。7月30日に土層堆積状況の記録作成と埋め戻し作業を実施して現地調査は終了した。

2 資料整理

遺物洗浄は本発掘調査期間中に基礎整理作業として掘削委託業者が実施した。資料整理は平成26年10月より着手した。出土した土器は注記・分類・仕分け・接合・復原を経て、実測を行い、実測図をAdobe Illustrator CS3に取り込み、版組及びトレース作業を実施した。石器についても注記・分類・仕分けを経て、実測を行い、実測図をAdobe Illustrator CS3に取り込み、版組及びトレース作業を実施した。遺構図版は図面及び写真測量のデータをAdobe Illustrator CS3に取り込み、編集して作成した。それと並行して遺物写真撮影及び写真図版作成を実施した。遺物写真は6×7モノクロフィルムを用いて撮影した。遺物と記録類の版組終了後に編集作業を行っている。また、報告書の作成とともに、収納作業も実施している。

第2表 現地調査・資料整理期間一覧表



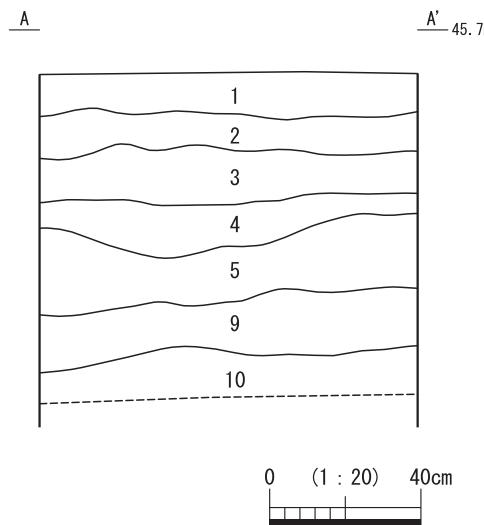
第5図 調査区配置図

第2節 基本土層

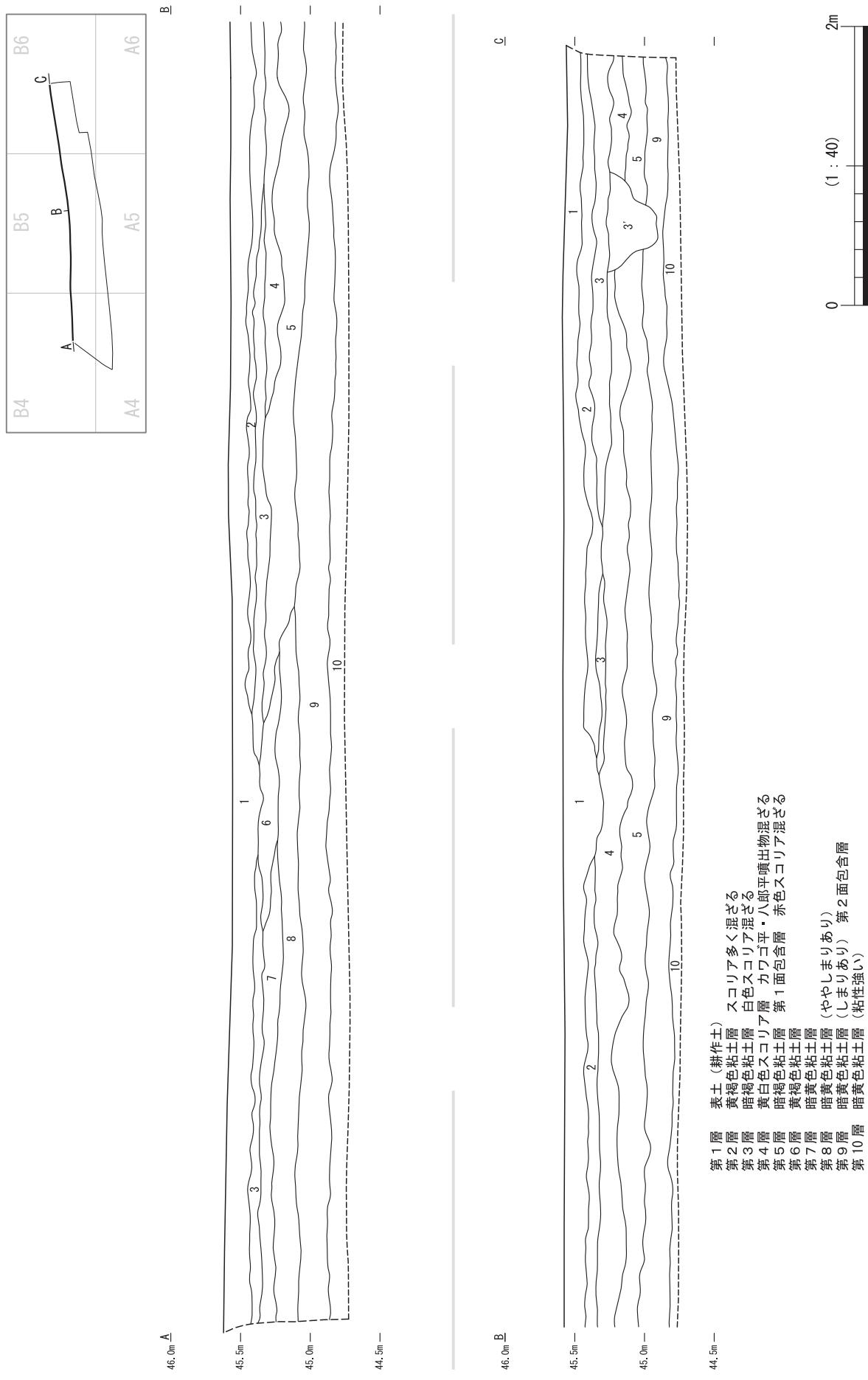
東田遺跡の層序は以下のとおりである。

- 第1層 表土（耕作土）
- 第2層 黄褐色粘土層 スコリア多く混ざる
- 第3層 暗褐色粘土層 白色スコリア混ざる
- 第4層 黄白色スコリア層 カワゴ平・八郎平噴出物混ざる
- 第5層 暗褐色粘土層 第1面包含層 赤色スコリア混ざる
- 第6層 黄褐色粘土層
- 第7層 暗黄色粘土層
- 第8層 暗黄色粘土層（ややしまりあり）
- 第9層 暗黄色粘土層（しまりあり） 第2面包含層
- 第10層 暗黄色粘土層（粘性強い）

いずれの層も自然堆積層で、第2層から第4層までが無遺物層、第5層から第10層が遺物包含層である。第10層は70～90cm程度の厚さがあり、その下層は20cm程度の暗褐色スコリア層、さらにその下層は礫層であることが確認調査で明らかにされている。また、第5層以下の発色は調査区の西に進むほど不明瞭になっている。



第6図 基本土層図



第7図 土層堆積状況図

第3節 遺物

1 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はすべて縄文時代の包含層資料である。

(1) 土器

報告にあたり、以下のように時期を主体に分類した。

I群 縄文時代中期の土器

- 1類 五領ヶ台式土器
- 2類 a 勝坂1式土器
- 2類 b 勝坂2式土器
- 3類 加曽利E式土器
- 4類 曾利式土器
- 5類 その他の中期土器

II群 縄文時代後期の土器

- 称名寺式土器

III群 その他の縄文土器

ア I群1類 五領ヶ台式土器（第8図1～5 図版3）

1と2は五領ヶ台II式の土器と考えられる。1は内弯する胴上部付近の破片である。横位と弧状の半截竹管文が施文されている。2は横位の半截竹管文を無造作に引き、環状の貼付文を付けている。3と4は五領ヶ台式併行期（註1）の横位のR L縄文を施文した口縁部である。ともに外面に帶状の肥厚部を有する。3は胴部が開き、肥厚部には橢円形の刺突文を施している。4は胴上部が内弯する。5は無文の口縁部で、外面の形状により、五領ヶ台式併行期のものとした。

イ I群2類a 勝坂1式土器（第8図6～10 図版3）

6は縦区画文様の土器の胴部である。破片の右半部がさらに横位に区画され、区内は連続刺突で充填されている。7は内弯する胴上部付近の破片である。半截竹管内皮を用いた縦位と弧状の半隆帯を配している。8は三角押文を横位に3条密接して施文し、一部三角押文を縦位に付けている部分も見られる。9は横位のキャタピラ文を施文し、その上下に三角押文を横位または斜位に密接して施文している。10は磨滅が著しい。横位の区画を作る隆帯の脇を連続爪形文と推定される刻みで押さえている。

ウ I群2類b 勝坂2式土器（第8図11～20 図版3）

I群2類aに比して三角押文等の文様の密度が低くなる。11は隆帯で縦位区画を作り、さらに半橢円形の区画を作り出している。隆帯の脇は三角押文で押さえ、一部角押文を施文している部分が見られる。12は横位の隆帯の下に弧状の隆帯を垂下させ、その間に三角形と考えられる隆帯の区画を付けている。それぞれの隆帯の脇は三角押文で押さえている。13は磨滅が著しい。隆帯による弧状の区画と推定され、隆帯の脇はキャタピラ文で押さえている。14は環状の突帯を有する。突帯の上下と右脇はキャタピラ文と推定される刻みを施している。15は隆帯による弧状の区画で、隆帯の脇はキャタピラ文で押さえている。16は横位のキャタピラ文を2段密接して施文している。17は棒状工具を用いた横位の波状沈線である。18と19は地文の縄文の部分に当たる破片である。18は縦位のL R縄文を施文している。19は横位のR L縄文を施文している。20は無文の口縁部である。平口縁で、内面が肥厚している。



第8図 出土遺物実測図1（土器）

エ I群3類 加曾利E式土器（第8図21～25 図版3）

21は磨消縄文帯を有する胴部である。22は縦位の沈線のみが見られる。23は胴下部の文様帯の弯曲部に当たると考えられる。これらの個体の型式は加曾利E3式後半からE4式と推定される。

24と25は加曾利E4式最終段階の口縁部に微隆起線文を有する個体である。24は波状口縁を有し、口縁部から微隆起線文までを無文としている。微隆起線文から下は、縦横に施文したL縄文をなで消している。25は平口縁で、無文である。

オ I群4類 曾利式土器（第8図26～32 図版4）

26～29は胎土に雲母を多く含んでいる。これらの4個体は同一個体の可能性がある（註2）。26は太い沈線で強調した低隆帶の区画内に櫛齒状工具で連続ハの字文を付けている。一部低隆帶に沿った櫛齒状工具による列点文を付けた部分もある。27は櫛齒状工具による連続ハの字文を付けている。28と29は太い沈線で強調した低隆帶を付けている。30は非常に太い沈線で強調した低隆帶の区画内に円形文と推定される文様を2箇所付けている。これらの土器は曾利IV式と推定される。

31は曾利V式の土器である。平口縁で、口縁直下には1条の沈線が巡っている。逆U字状の区画（註3）内には連続ハの字文を付けている。口縁直下の沈線と区画の間にも横位の沈線を付けている。

32は曾利系の土器であると考えられる。沈線を波状に付けている。

カ I群5類 その他の中期土器（第8図33 図版3）

33は中期後半の土器と推定される。厚手で、口縁部は外へ開く。緩やかな波状口縁を有し、無文である。

キ II群 称名寺式土器（第8図34 図版4）

34は波状口縁を有し、口縁の形状に沿って沈線を2条引き、口縁部は無文帯を置かずにLR縄文を施文している。2条の沈線の間は無文帯とし、その下部はLR縄文を施文している。

ク III群 その他の縄文土器（第8図35～36）

35と36は時期不明の平底で無文の底部である。

（註1）この形態の土器は、東関東に分布し、「下小野式土器」と分類されていたが、近年の資料増加に伴つて五領ヶ台式土器の1器種としての色彩が強くなっている（鈴木他 1981）。

（註2）池谷信之氏の御教示によると、胎土に雲母を多く含んだ土器は西相模酒匂川周辺地域に多く分布しているとのことである。

（註3）通常曾利V式土器の逆U字状の区画の上部は角ばっているが、池谷信之氏の御教示によると、この土器に関しては区画のカーブが緩いことから、加曾利E式土器の影響を受けている可能性があるとのことである。

（2）石器

ア 石鏃（第9図37～38 図版4）

37は抉りの小さい凹基無茎石鏃と考えられる。形状は二等辺三角形を呈する。38は脚部だけが残存している。

イ 楔形石器（第9図39～41 図版4）

いずれも方形に近い形状を呈し、相対する二辺から対辺に向かって剥離痕が残る。

ウ 細石核（第9図42 図版4）

側縁で細石刃を剥離している。正面上面に打面調整の痕跡が見られる。右側縁は二次加工でスクレイバーに転用している。

工 石核（第9図43 図版4）

打面を何度も転移しながら剥片剥離を行っている。

才 磨敲石・磨石（第9図44～45 図版4）

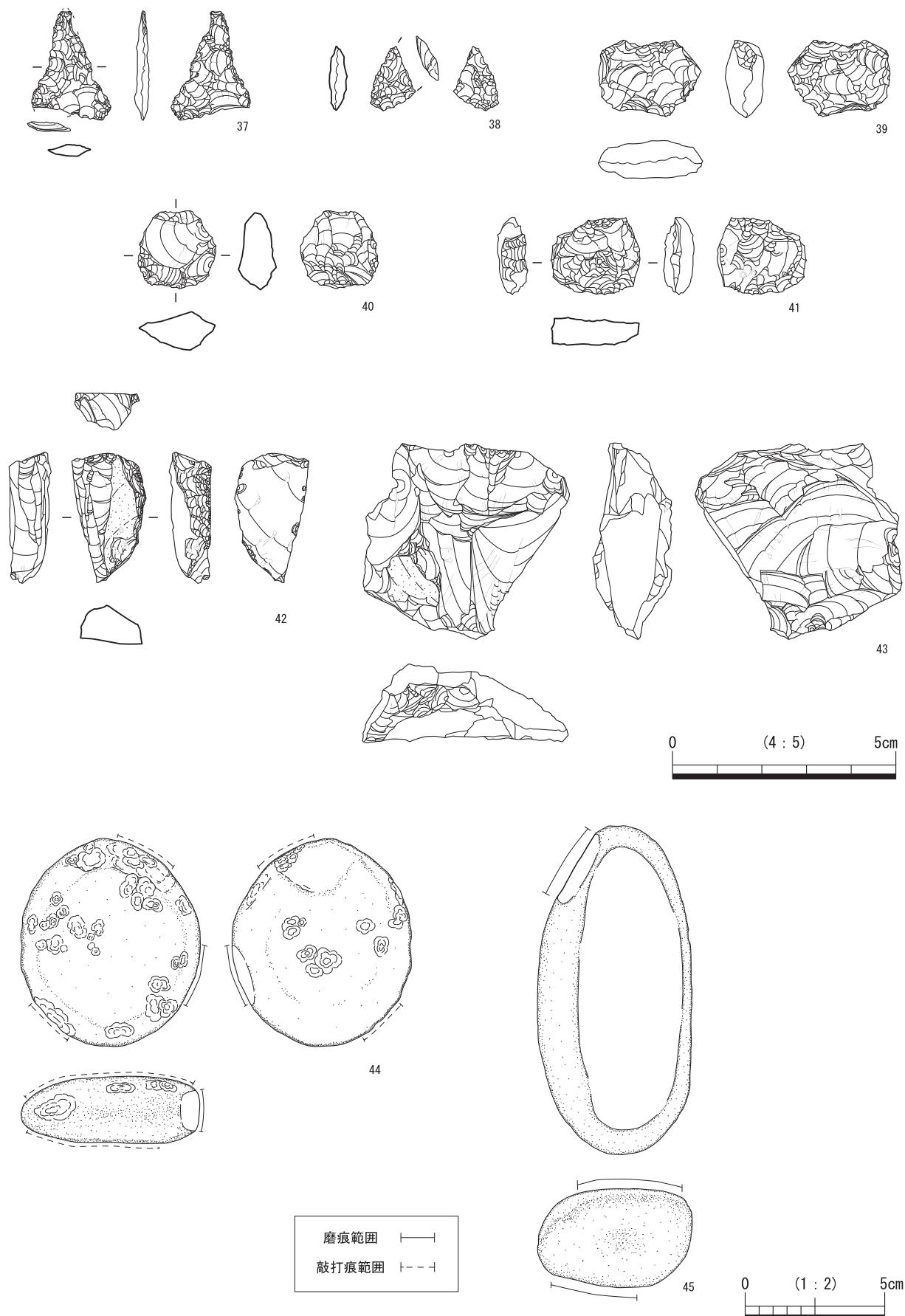
44は表裏ともに敲打痕が残り、右側縁に磨痕が見られる。45は表裏面と左側縁上部に磨痕が見られる。

第3表 出土遺物観察表（土器）

挿図番号	図版番号	調査区	群	類	胎土	色調
1	3	-	TR3 上	黄褐色粘土層	I群 1類 1mm以下の白・灰・黒・褐色粒子を多量に含む	7.5YR5/6 明褐
2	3	-	TR2		I群 1類 1mm以下の白・灰色・半透明粒子を多量に含む	10YR5/4 にぶい黄褐
3	3	1区 第1面			I群 1類 2mm以下の白・黒色粒子を少量含む 1mm以下の灰・褐色・半透明粒子を含む	7.5YR5/4 にぶい褐
4	3	-	TR3 下	暗褐色粘土層	I群 1類 1mm以下の白・黒色粒子を含む	10YR5/6 黄褐
5	3	1区 第2面			I群 1類 2mm程の白色粒子を少量含む 1mm以下の白・灰・褐色・半透明粒子を多量に含む	7.5YR6/6 橙
6	3	1区 第2面			I群 2類a 1mm以下の白色・半透明粒子を多量に含む 1mm以下の黑色粒子を少量含む	7.5YR5/6 明褐
7	3	-	TR3 下	暗褐色粘土層	I群 2類a 1mm以下の白・灰・黒・褐色粒子を多量に含む	7.5YR5/8 明褐
8	3	1区 表採			I群 2類a 1mm以下の白色粒子を多量に含む 黑・褐色・半透明粒子を少量含む	7.5YR5/6 明褐
9	3	1区 表採			I群 2類a 1mm以下の白色・半透明粒子を多量に含む 黑色・透明粒子を少量含む	5YR5/6 明赤褐
10	3	2区 第2面			I群 2類a 2mm以下の白・黒色・半透明粒子を多量に含む	5YR5/6 明赤褐
11	3	2区 重機掘削時			I群 2類b 1mm以下の白色粒子を多量に含む 褐色・半透明粒子を含む	7.5YR5/6 明褐
12	3	2区 重機掘削時			I群 2類b 1mm以下の白・黒色・透明粒子を多量に含む	5YR5/6 明赤褐
13	3	1区 第2面			I群 2類b 1mm以下の白色粒子を多量に含む 1mm以下の灰・褐色・透明粒子を少量含む	7.5YR6/6 橙
14	3	-	TR3 下	暗褐色粘土層	I群 2類b 2mm以下の白色粒子を多量に含む 1mm以下の灰・黒・褐色・半透明粒子を含む	7.5YR5/6 明褐
15	3	-	TR2		I群 2類b 1mm以下の白色粒子を多量に含む 黑・褐色・半透明粒子を少量含む	7.5YR4/3 暗褐
16	3	2区 重機掘削時			I群 2類b 1mm以下の白色・透明粒子を多量に含む 黑色粒子を少量含む	5YR5/6 明赤褐
17	3	-	TR3 下	暗褐色粘土層	I群 2類b 1mm以下の白・灰色粒子を多量に含む	7.5YR6/6 橙
18	3	1区 重機掘削時			I群 2類b 1mm以下の白色粒子を多量に含む 灰色・半透明粒子を少量含む	7.5YR5/6 明褐
19	3	2区 第1面			I群 2類b 2mm以下の白・黒・褐色・透明粒子を含む	5YR5/6 明赤褐
20	3	1区 第2面			I群 2類b 1mm以下の白・灰・褐色・透明粒子を多量に含む	7.5YR5/6 明褐
21	3	-	TR3 下	暗褐色粘土層	I群 3類 1mm以下の白・灰・褐色粒子を多量に含む 透明粒子を少量含む	10YR5/6 黄褐
22	3	1区 攪乱			I群 3類 1mm以下の半透明粒子を多量に含む 白・黒・褐色粒子を含む	5YR5/6 明赤褐
23	3	-	TR3 上	黄褐色粘土層	I群 3類 1mm以下の白・灰色粒子を多量に含む 褐色・半透明粒子を含む	7.5YR5/4 にぶい褐
24	3	2区 重機掘削時			I群 3類 1mm以下の白・灰色・半透明粒子を多量に含む	5YR4/6 赤褐
25	3	1区 第2面			I群 3類 1mm以下の白・黒色粒子を多量に含む	5YR5/6 赤褐
26	4	1区 第1面			I群 4類 雲母・1mm以下の白色粒子を多量に含む 灰・褐色粒子を少量含む	5YR4/6 赤褐
27	4	2区 重機掘削時			I群 4類 雲母・1mm以下の白色・半透明粒子を多量に含む 褐色粒子を少量含む	7.5YR3/1 黒褐
28	4	2区 重機掘削時			I群 4類 雲母・1mm以下の白色・半透明粒子を多量に含む 黑色粒子を少量含む	5YR4/4 にぶい赤褐
29	4	1区 第2面			I群 4類 雲母・1mm以下の白色粒子を多量に含む 褐色・半透明粒子を少量含む	5YR4/4 にぶい赤褐
30	4	1区 第1面			I群 4類 1mm以下の白・灰・黒色粒子を多量に含む 雲母、褐色粒子を少量含む	5YR5/6 明赤褐
31	4	1区 第1面			I群 4類 1mm以下の白・灰色粒子を多量に含む 雲母を含む	5YR5/4 にぶい赤褐
32	4	1区 第2面			I群 4類 1mm以下の白・灰・褐色・半透明・透明粒子を多量に含む	5YR5/6 明赤褐
33	3	2区 重機掘削時			I群 5類 1mm以下の白色粒子を多量に含む 灰・褐色・半透明粒子を含む	5YR5/8 明赤褐
34	4	1区 第2面		II群	2mm以下の白・褐色・透明粒子を多量に含む	5YR5/6 明赤褐
35	-	TR3 上	黄褐色粘土層	III群	1mm以下の白色粒子を多量に含む 黑・褐色粒子を含む	7.5YR5/6 明褐
36	-	TR2	III群		2mm以下の白色粒子を多量に含む 1mm以下の灰・黒・褐色粒子を含む	7.5YR5/6 明褐

第4表 出土遺物観察表（石器）

挿図番号	図版番号	調査区	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材
37	4	1区 第1面	石鏸	(2.4)	1.8	0.3	0.9	黒曜石
38		2区 表採	石鏸(脚)	(1.5)	(1.0)	(0.3)	0.4	黒曜石
39	4	1区 表採	楔形石器	1.7	2.3	1.5	3.4	黒曜石
40	4	1区 第2面	楔形石器	1.7	1.7	0.9	2.2	黒曜石
41	4	1区 第2面	楔形石器	1.7	2	0.7	2.3	黒曜石
42	4	1区 第2面	細石核	2.9	1.6	0.9	4.2	黒曜石
43	4	1区 第2面	石核	4.4	4.6	1.7	26.5	黒曜石
44	4	2区 重機掘削時	磨敲石	7.5	6.4	2.4	138.8	
45	4	1区 表採	磨石	11.8	5.6	3.6	307.8	



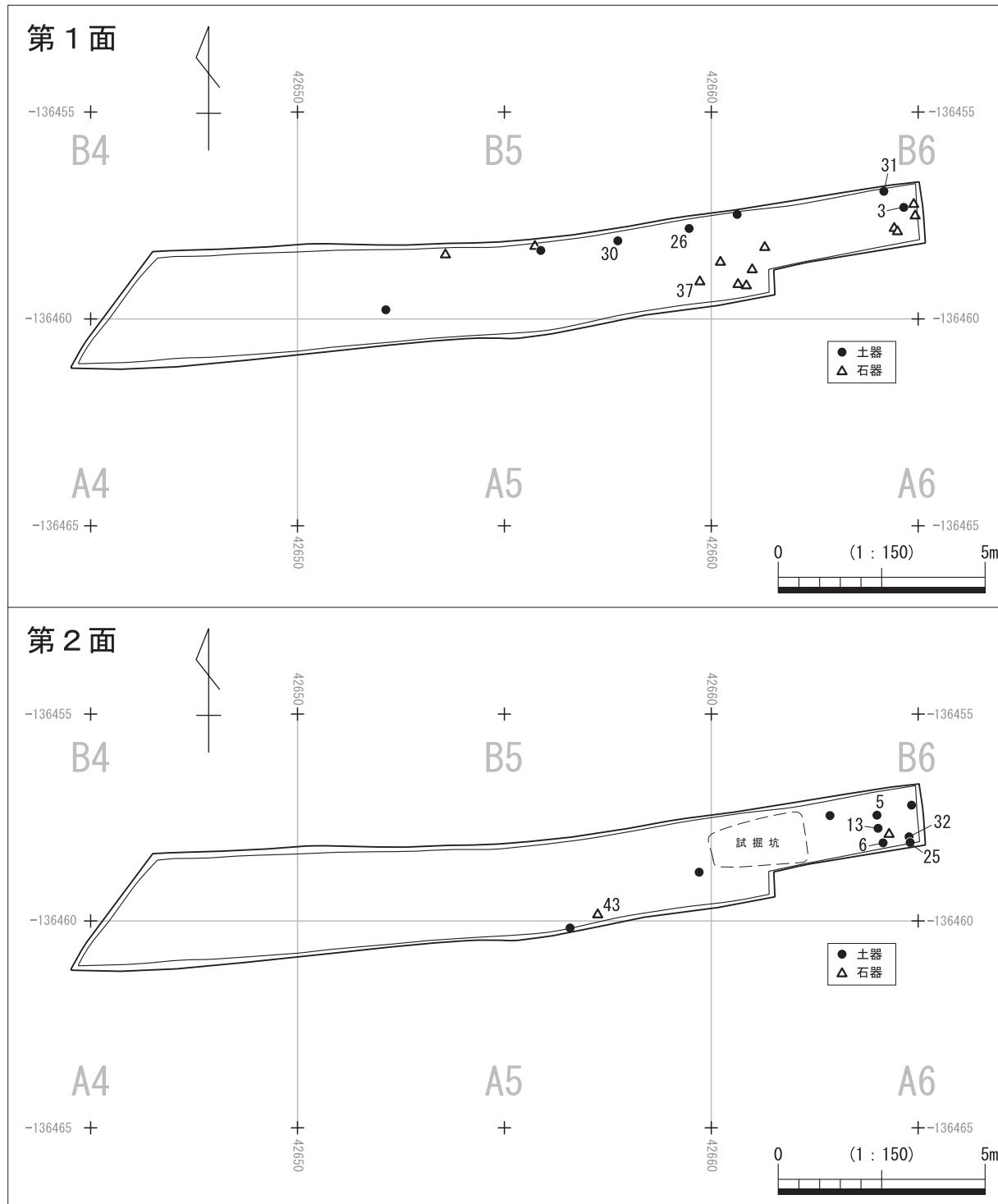
第9図 出土遺物実測図2（石器）

2 遺物出土状況

遺物の出土状況図を第10図に示した。遺物は調査区東側の1-1区に集中して出土している。

土器は第1面、第2面とも新旧の型式が混じって出土しており、同一の面として捉えてよいと思われる。しかし本遺跡では比較的後期の型式であるI群4類の土器の多くは第1面から出土している。

石器は、位置が確認できたものを述べると、第1面では37の石鏃が出土している。この石鏃の周囲には黒曜石の剥片が多く出土している。第2面では43の石核が出土している。また、位置は確認できなかつたが、40・41の楔形石器と42の細石核が1-1区の第2面で出土している。



第10図 遺物分布図

第4章 東田遺跡のまとめ

今回の調査では遺構は検出されなかった。遺跡の中心は北側の山寄りの位置にあると想定される。

遺物は包含層中から縄文時代中期を主体とする土器と石器が散発的に出土した。

今回の調査では五領ヶ台式土器が出土した。本遺跡から南東に約4.5km離れた位置にある段間遺跡は五領ヶ台I式・II式土器が多量に出土した遺跡として知られている（河津町教委1980・1984b・1989・1998・2001）。段間遺跡の北に近接する塔ノ峰遺跡（河津町教委1991）、第1章第2節で前述した春蔵遺跡でも五領ヶ台式土器の出土が報告されていることから、この地域が五領ヶ台式土器の一大分布域であったことが想定される。

一方で、本遺跡で出土した勝坂1式・2式土器は、春蔵遺跡、段間遺跡などで出土している勝坂式土器より古い段階のもので、河津町域の遺跡からの出土例も多くない。段間遺跡第四次調査で出土した勝坂式土器の中には、本遺跡で出土したものに近い形態の連続爪形文を施した土器が見られるが、この遺跡における勝坂式土器の主体となるのは、隆帶上に連続爪形文を施した、本遺跡出土の勝坂式土器より新しい形態のものである。

本遺跡で出土している加曾利E式土器、曾利式土器も、河津町域では出土例の少ない時期のものが出土している。本遺跡では加曾利E3式後半からE4式の土器が出土している。河津町域で出土している加曾利E式土器は、春蔵遺跡、段間遺跡などで出土しているE1式～2式の土器が主体である。また、本遺跡で出土している曾利式土器はIV～V式が主体である。河津町域で出土している曾利式土器はI式～III式が主体であり、春蔵遺跡ではこの時期に該当する堅穴住居跡や土坑が検出されている。段間遺跡では曾利IV～V式土器が出土しているが、本遺跡では出土していない渦巻文を施した口縁部の破片である。

石器は、伊豆半島南部では初例となる細石核が出土したことが注目される。伊豆半島南部は現在のところ後期旧石器時代の遺跡の空白地である。よって、この細石核は南伊豆地域にもこの時期の遺跡が存在していたことを示す重要な資料と言えるであろう。

調査面積も狭小で、図示できた遺物も包含層資料45点のみであったが、河津町域の縄文時代の遺跡の様相をさらに明らかにする成果を得たと言ってよいであろう。今後の出土例の増加を待って検討を重ねていく必要があると思われる。

《参考文献》

伊豆ジオパーク推進協議会 2012『南から来た火山からの贈りもの 伊豆ジオパーク構想

日本ジオパークネットワーク加盟申請書』

今福利恵 1990「勝坂式土器様式の個性と多様性」『考古学雑誌』第76巻第2号

今村啓爾 1985「五領ヶ台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」

『東京大学文学部考古学研究室紀要』第4号

浦志真孝・池谷信之 1998「静岡県における勝坂式土器の地域的様相—県内東部の勝坂式土器を中心にして—」

『縄文時代中期前半の東海系土器 北屋敷式土器の成立と展開』静岡県考古学会シンポジウム‘97

第5回東海考古学フォーラム 予稿集

柿沼修平 1981「称名寺式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器II

金子浩之 1994「伊豆を中心とした縄文中期後半土器の様相」

『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』

河津町教育委員会 1978 『河津町波来横穴調査報告書』
河津町教育委員会 1980 『河津町見高段間遺跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会 1983 『河津町の文化財』
河津町教育委員会 1984a 『姫宮遺跡発掘調査概報III』
河津町教育委員会 1984b 『段間遺跡発掘調査概報（第5次）』
河津町教育委員会 1989 『段間遺跡第六次調査の記録』
河津町教育委員会 1991 『塔ノ峰遺跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会 1993 『河津城跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会 1994 『姫宮遺跡第12次・第16次発掘調査報告書』
河津町教育委員会 1998 『段間遺跡第7次発掘調査報告書』
河津町教育委員会 2001 『段間遺跡第8次発掘調査報告書』
河津町教育委員会 2010 『家ノ上・中ミヨ・宮林遺跡発掘調査報告書』
河津町教育委員会 2012 『家ノ上・中ミヨ・宮林遺跡発掘調査報告書II』
小山真人編 2011 『伊豆半島ジオパーク構想指針書』 静岡県文化政策部観光局観光政策課
山武考古学研究所 1992 『静岡県河津町春蔵遺跡発掘調査報告書』
静岡県総務部防災局 2002 『地域の地盤と地震被害（伊豆南部地域）』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『押出シ遺跡（遺物編）』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『富士川SA関連遺跡（遺物編）』
静岡県埋蔵文化財センター 2013 『富士岡1古墳群他』
末木健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器II
鈴木保彦・能登健・樋口昇一 1981 「関東・中部・北陸地方」『縄文土器大成』第2巻 中期

写 真 図 版

図版 1



調査区遠景（北西より）



1-1区全景（西より）

図版2

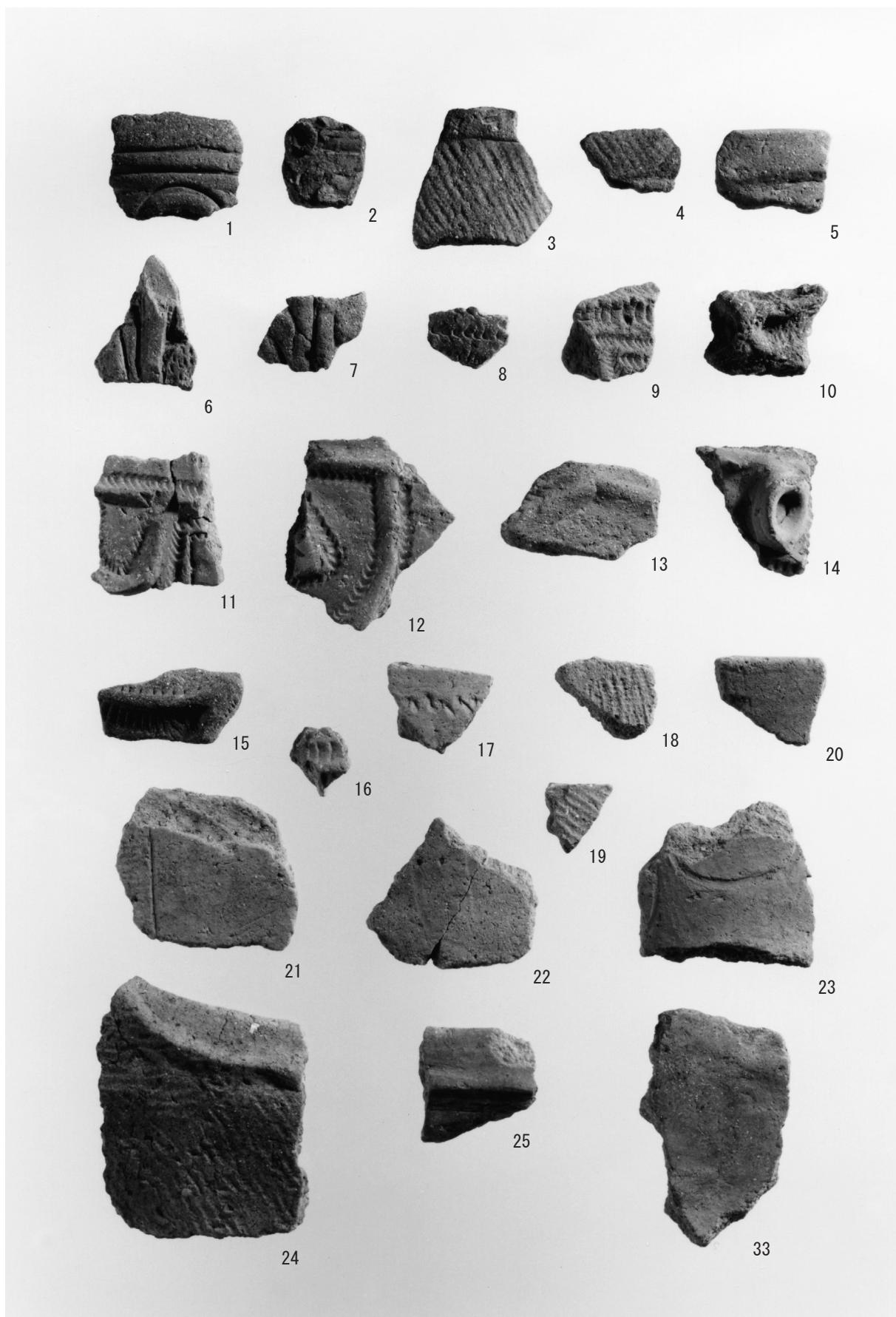


1-2区全景（北より）



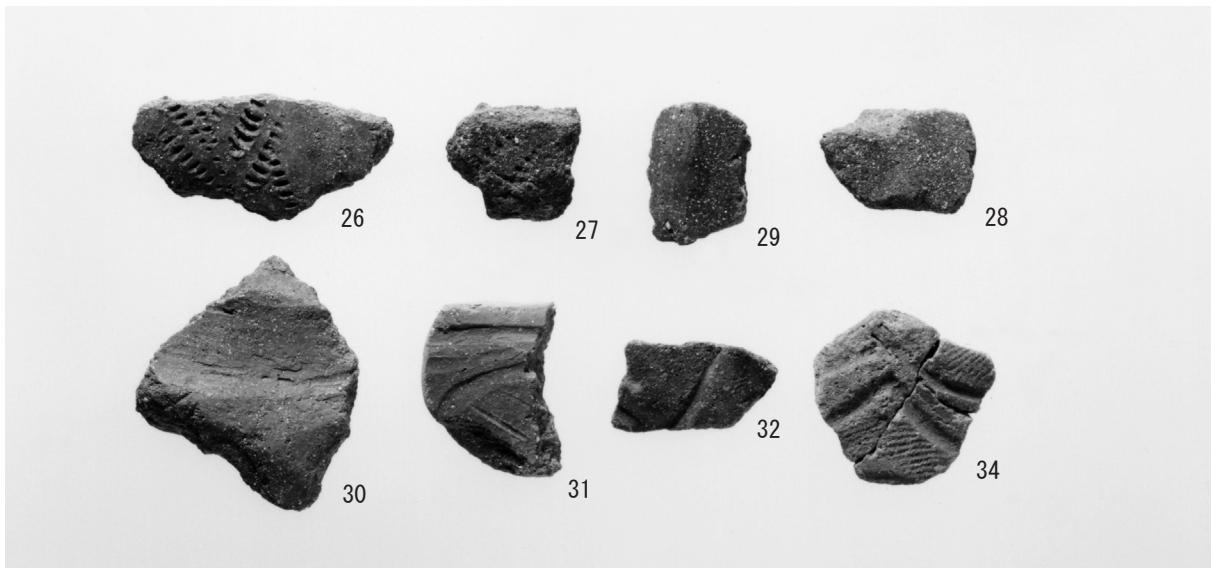
土層断面

図版3

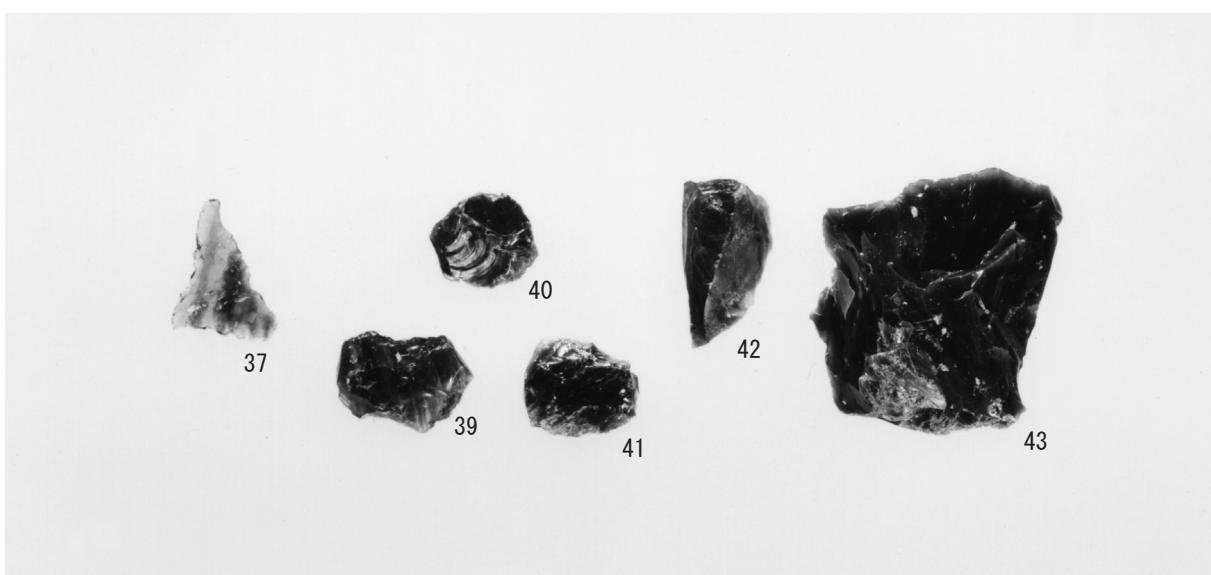


土器 五領ヶ台式・勝坂式・加曾利E式

図版 4



土器 曾利式・称名寺式



剥片石器



磨・敲石類

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひがしだいせき							
書名	東田遺跡							
副書名	(主) 下佐ヶ野谷津線地域自主戦略交付金(交通安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第47集							
編著者名	岩崎しのぶ							
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261(代)							
発行年月日	2015年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町	遺跡 番号					
ひがしだいせき 東田遺跡	しづおかけん 静岡県 かたちごん かわづちょう 賀茂郡河津町 かわづいんじやま ちなん 川津役場 地内	223026		34° 46' 09"	138° 57' 59"	20130711 ～ 20130730	40	記録保存調査 (道路)

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第47集
東田遺跡

(主) 下佐ヶ野谷津線地域自主戦略交付金(交通安全)
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年3月31日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL 054-262-4261(代)
FAX 054-262-4266
印 刷 所 株式会社エムクリエイション
〒422-8032 静岡県静岡市駿河区有東2-4-6
TEL 054-654-0018

